

空洞星雲

森村誠一

中公文庫





中公文庫

くうどうせいうん
空洞星雲

定価はカバーに表示してあります。

1998年3月3日印刷

1998年3月18日発行

著者 もりむらせいいち
森村誠一

発行者 笠松 巖

発行所 中央公論社 〒104-8320 東京都中央区京橋 2-8-7

TEL 03-3563-1431(販売部) 03-3563-3664(編集部) 振替 00120-4-34

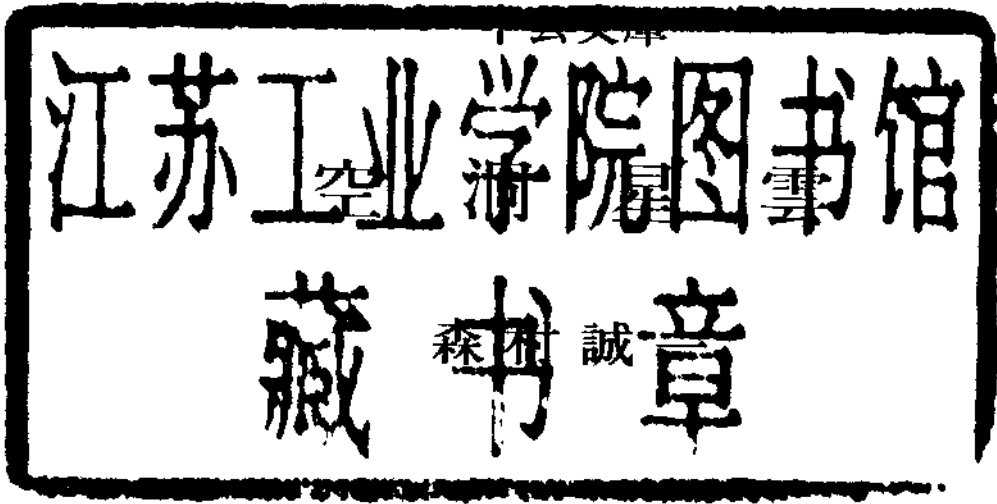
©1998 CHUOKORON-SHA,INC. / Seiichi Morimura

本文・カバー印刷 三晃印刷 用紙 王子製紙 製本 小泉製本

ISBN4-12-203099-4 C1193

Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。



中央公論社

目次

青春の手型	7
失踪 <small>しつぞう</small> の留守番	16
フラッシュバック	29
人工妻	49
異星人の社交場 <small>サロ</small>	57
転がる玉の行方	84
二重施錠 <small>ツ</small> の密室 <small>ロ</small>	107
邪 <small>ま</small> まな密室 <small>こ</small>	124
犯行の正誤表	138

“一席二鳥”のアリバイ

157

めぐり遇あったハンケチ

184

殺意の分業発信

225

追加された死体

270

死光

288

祭りの後

298

解説

和田義彦

318

空洞星雲

〈筆者から〉

本編は独立した作品ですが、登場人物の一部が『太陽黒点』と共通しております。前作における彼らの役割を知っていただくといっそう興味が深くなるとおもいますので、簡単に紹介しておきます。

浅見隆司

サギ会社、大閤商事の中心人物。

大手総合商社八幡朱印商事に父を自殺に追い詰められ、家を破壊され、報復の念に燃えている。また同社社員江木啓介には学生時代残酷なシゴキをうけ、妻を奪われて深い怨みを抱いている。

羽石記代子

浅見隆司と同棲している。元

八幡朱印商事の接待社員。政界の黒幕師岡国尊に侍っていたとき、謎の交通事故を起こし、記憶に障害をうけている。国尊の秘密を知りすぎて、人間植物化手術を施されている。

師岡国尊

政界の黒幕。八幡朱印商事の幹

部源見雄五の依頼をうけ、米国航空機メーカー・サザンクロス社の航空機売込工作に關して賄賂をうけて、疑獄の中心人物となる。現在脳血栓で病臥中、浅見の先妻、美知子が侍っている。

江木啓介

八幡朱印商事社員、浅見隆司の

高校の先輩。国尊や源見の走狗となつて働くが、サザンクロス疑獄の発覚によつて斬り捨てられる。

目形三吉

別名むささび小僧のビル荒らし

の怪盗。浅見と組んで八幡朱印商事に一泡吹かせようと企む。

笛木良成

伊東の笛木精神病院の院長、師

岡国尊と深いつながりがあり、羽石記代子にロボットミイ手術を加えた。

ジェローム・シュナイダー

サザンクロス

社の副社長、同社機売込工作の中心人物。

青春の手型

1

「私は、こんな山の中の古ぼけた町にいつまでもくすぶってはいないわ。卒業したら東京へ行くの。東京にはなんでももあるわ。私、きつとこの手で東京のなにかをつかみ取ってみせるわ。ああ、卒業が待ちきれないくらいよ」

少女は、身悶みしたえするように、町の四方を屏風びょうぶのように囲む山脈のかなたの空へ目を向けた。

ちょうど、太陽が西山の稜線りょうせんへ没したところで、山の背後から噴き上げる残光が、空全体を小豆色あずきに中和して少女の瞳ひとみに反映している。だが、彼女の臉まぶたは、その残照の美しさよりも、落日を呑んだ山のかなたの遠方にあるはずの未知の大都会を想い描いている。

「でも東京には、それだけ危険が多いよ」

少年は、自分の手の届かない遠方へ翔び立って行こうとする少女を留めることがほとんど絶望的な試みであるのを悟りながらも、逆らい難い運命にはかない抵抗をするように、やんわりと反駁はんぱくした。

「危険がなによ。危険を恐れていてはなにもできはしないわ。ねえ、健治君けんじ、卒業したら私といっしょに東京へ行かない。二人で協力してやっていけば、大丈夫よ」

「ぼくは行けないって言ったろう。おやじが病身だから、地元で就職して生活を支えなければならぬんだ」

「東京で就職しても送金できるわよ。こんな田舎にはろくな会社もないわ。東京の一流の会社へ入れば、お給料だっていいし、その気になれば、いくらでも出世できるわよ」

「そんな簡単に就職できないよ」

「だから探せばいいじゃないの。健治君ほどの実力があれば、必ずいい所へ入れるわ」

「そんな甘いものじゃないとおもうよ。ただ憧れあこがだけで東京へ出て、ひどく傷ついて帰って来る人が多いじゃないか」

「私は、絶対にそんな風にはならないわ。健治君は男でしょ。男なら勝負することが大切よ。戦わないうちから負けることを考えていたら、勝てる戦いだって、負けてしまうわ。

健治君がそんな引つ込み思案になったのも、この町に毒された証拠よ。この町には毒があ

るのよ。野心を失わせて、男の人の牙を抜いてしまふ毒が。私は健治君にそんな風になつてもらいたくないわ」

「ほくにも野心はあるさ。でも野心はなににも東京へ行かなくても追えるよ」

「こんな小さな田舎町でどれだけの野心が追えると言うの。東京が海なら、こんな町、プールですらないわ。水たまりよ。どうせ泳ぐのなら海で泳ぎましようよ。ねえ、本当にいっしょに行かない？」

少女は、少年の目を覗き込んだ。すでに残照はうすれ、暮れなずんだ空をうつした少女の目は海のように深く暗い影を帯びている。その深淵から少年は吹きつけられるような誘惑をおぼえた。

自分もこの美しい野性的な少女と手を携えて、未知の都会へ出帆して行きたい。だれが若い漠々たる野心をこんな山間の町に自閉したいものか。

自分も行きたい。自分もここから脱け出したい。生まれて十八年、その家の家族構成から、各人の小さくせに至るまで、たがいに知悉しているような生活はもうまっぴらである。

現に、彼と少女の仲は町の人たちの好奇の噂の的となっている。同じ町内から小学中学と机を並べ、同じ高校へ通った、仲の良い幼なじみにすぎないのに、淫らな目で眺める。

それというのも彼女が、こんな田舎町に閉じこめておくには勿体ないような器量の持ち主だからであろう。器量だけでなく、性格も派手で、自分の生まれた郷里を見下し、自負する容色をもって都会に挑もうとしていた。

彼女の場合、「鄙しなには稀まれな」容色が、外界へ飛び出すためのバネとなって作用したのである。

だが少年は、彼女のように野心だけに身を委ねるわけにいかなかった。一家の大黒柱である父親が病いで倒れ、家族は少年が卒業する日を待ちかねていた。いまでも学校に隠れてのアルバイトに次ぐアルバイトである。学校は彼のアルバイトを察知しているが、家庭の事情を考慮して、黙認している。

そんな父や家族を捨てて、自分の野心を追うために、少女と「駆け落ち」はできない。「やっぱりだめだよ」

少年は、誘惑に目を瞑つむるようにして首を振った。

「両親やきょうだいを捨てられないと言うのね。立派な心がけだわ。でも健治君の青春はあなた一人のものよ。二度と繰り返しのきかない青春を家族のために犠牲にして悔いはないの」

「ぼくたちは若い。慌てて、東京へ出る必要はないよ」

「私、慌ててなんかいないわよ」

「いやぼくの場合だよ。ぼくの場合、あらゆる意味でまだ準備ができていない。こんな準備不足の状態で東京へ出て、いいことはないよ。準備ができたらいずれきみの後を追いかけていく。チャンスはまだあるさ」

「私、そのときまで待っていないかもしれないよ」

未知の都会に魂を吸われた少女は、自分の言葉が少年にとってどんなに残酷であるか気がつかない。

「悲しいけれど、ぼくにはきみを拘束する権利はない」

「卒業したら、私たち別れなければならぬのね。私、健治君のことはどこへ行っても忘れないわ」

二人は、東の間^{つか}たがいの目の奥を見つめ合った。残照は、西の山稜^{さんりょう}に煮つめられ、東の空から濃い夕闇^{ゆうやみ}が満ち潮のようにひたひたと押し寄せて、立ちすくんだ二人の体を押し包んだ。山国の秋は早く、風が冷たい。それは二人の別離の近いことを予告するようにはかなく脆^{もろ}そうな夕暮の一時であった。

「ようよう、ご両人」

遠方から、寄り添って立つ二人を離^{はや}し立てる声があった。

最も定型的な卒業式オーソドックスは終わった。式次第はいとも厳粛に進み、校長の送辞も、生徒の「仰げば尊し」の合唱も申し分なく感動的であった。師弟の中には涙を隠さない者もいた。卒業式が体制的な形式であるという声はあっても、師から教えを乞い、同じ学び舎やで、机を並べて学んだ三年間が今日で終るといふ感慨は、師弟の胸になにがしかの感傷を抱かざるを得ない。

卒業式は臆面おくめんもなくセンチメンタルなほうが卒業式らしいのである。

この閉鎖された山間の小さな町の高校には、近頃流行の反体制の風も吹き入る隙すきがなかったらしく、卒業式は昔ながらに厳粛に、感傷的に挙行された。

生徒たちも、今日を最後の高校生活と、明日からの新たな生活のちがいを意識している。進学する者もいれば、就職する者もいる。都会へ出る者もいれば、地元に残る者もいる。いずれも今日を最後に、社会の八方に散りぢりになっていくのである。

同窓会に出席する機会はあるにしても、クラス仲間が全員顔を揃そろえることは二度とあるまい。小、中学校は、まだ子供であり、実社会から保護者によって隔離されている意識が強い。大学になると、完全なおとなであり、実社会に隣接している。学生も全国各地、あるいは

世界から集まってくる。

ところが高校は、精神はおとなに脱皮しつつあるのに、狭い地域社会コミュニティから生徒が集まっているので、小、中学校の延長の意識が強い。生徒の中にヨソ者は少ないのである。それだけに高校の卒業式は、子供からおとなへの脱皮であり、閉鎖された狭い地域から解放された広い世間への船出の観が強くなる。

これだけ多数の、同郷同年輩の若者が三年間も生活時間の主要な部分を共にする時期は、高校以外にはないだろう。それが自分の人生にとってどんな意味をもつか実感するのは、社会へ巣立ち、離郷して何年も経てからである。

いま彼らの胸を占めているのは、今日で終る高校生活への感傷と、明日から始まる新たな生活に寄せる期待と不安であった。中には感傷の一片もなく、閉鎖された防波堤オープンの中から自由な大海に乗り出して行く喜びだけに弾んでいる者もある。

卒業式の後、クラスの 하나가校庭の一隅に集まった。彼らはそこにセメントを流し、それが乾かないうちに、一人一人手型を押しつけた。クラス仲間がいつまでも手をつないでいこうというだれかの発案の下に行なわれた“手押し式”である。

一人一人まだ柔らかいセメントにしっかりと手型を押しつけていく間に、改めてこの三年間の高校生活が臉まぶたによみがえってきた。だれからともなく校歌が口吟くちずきまれ、それはすぐ

に全員の合唱になった。校歌から当時のクラスの愛唱歌に歌い継がれた。

命かけてと誓った日から素敵な思い出残してきたのに

あの時同じ花を見て美しいと言った二人の

心と心が今はもう通わない

あの素晴らしい愛をもう一度

赤とんぼのうたをうたった空は何にも変わっていないけれど

あの時ずっと夕焼けを追いかけていった二人の

心と心が今はもう通わない

あの素晴らしい愛をもう一度

広い荒野にぼつんといふよで涙が知らずにあふれてくるのさ

あの時風が流れてもかわらないといった二人の

心と心が今はもう通わない

あの素晴らしい愛をもう一度

あの素晴らしい愛をもう一度

(北山修作詞 加藤和彦作曲)